

食の安全 農薬の話 番外編

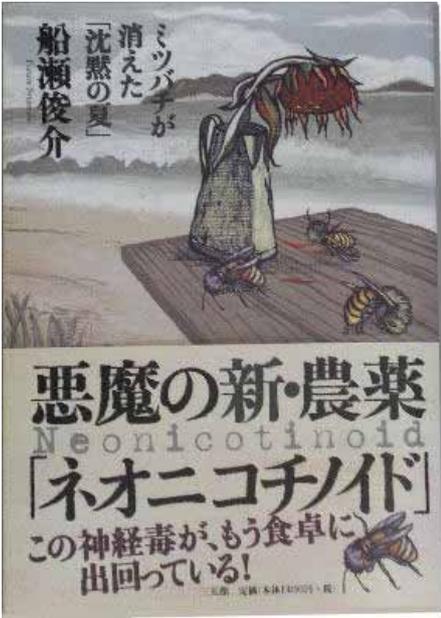


新農薬 「ネオニコチノイド」

農薬の話4で紹介した「沈黙の春」は、1962年海洋生物学者レイチェル・カーソン女士によって執筆されました。当時の新農薬「DDT」の人畜への害や、残留性が及ぼす環境汚染への危険を警告して、大きな衝撃を与えました。

今年6月、副題「ミツバチが消えた沈黙の夏」という本が出版されました。著者の船木俊介氏は、殺虫剤として使われ始めた、現代の新農薬「ネオニコチノイド」の恐怖を綴り、「沈黙の春」の続編が、すでに始まっていると指摘しています。

ネオニコチノイドは新しいニコチン様物質で、神経伝達物質を阻害して、中枢神経系を犯す神経毒です。近年発生している、ミツバチの帰巣本能が狂ったり、大量死したりする、蜂群崩壊症候群(CCD)は、このネオニコチノイド系農薬が主な原因ではないかと考えられています。



写真・三五館 発行 悪魔の新・農薬「ネオニコチノイド」

実際に蜂の死骸を分析して、その証拠を掴んだ農業大国フランスでは、養蜂家の訴えを認め、最高裁判決により全面使用禁止なっています。

ヨーロッパ各国では、次々と使用中止になっているネオニコチノイド系農薬ですが、日本では単位面積当たり、中国の100倍もの量が使用されているといえます。

この農薬は、水溶性で無臭です。さらに、従来の有機リン系農薬は、散布しても半径数百m程度しか広がりますが、ネオニコチノイド系農薬は、半径4kmにまで広がり、ミツバチや農業に有用な生物までも、死滅させてしまいます。

専門家は、昆虫と人間などの脊椎動物とでは、神経伝達物質の受容体が違うので、人体に害はないとされていますが、安全性が100%証明されたわけではありません。多発する、うつ病、自殺、引きこもり、凶悪犯罪など、脳や神経系への影響が懸念されているのです。

2005年夏、若手県盛岡市の藤原養蜂場では、2000万匹のミツバチが、ネオニコチノイド系農薬「ダントツ粉剤」によって大量死しています。

製品には「カイコやミツバチのいる地域では使

用しない。」と注意書がありますが、花を求めて移動するミツバチを規制するのは不可能です。

ミツバチなどの環境指標生物は、自然の豊かさと、時には危険を知らせてくれる大切な生き物です。特に植物の受粉には欠かせない昆虫です。

このままミツバチの蜂群崩壊症候群が広がると、作物の開花時期に受粉ができず、深刻な食糧危機や食料価格の高騰にもつながると警告しています。

最近、銀座のビルの屋上でミツバチを飼っている様子が、マスコミで紹介されています。自然の豊かな田舎よりも、農薬散布の少ない東京のほうに、ミツバチにとって楽園になっているのです。

有機リン系農薬に耐性をもつ生物が出現すると、それに代わるネオニコチノイド系農薬が登場したように、農薬と耐性を持つ生物とのイタチごっこは、これからも続くのでしょうか。

著者が警告する、ネオニコチノイド 蜂群崩壊症候群 植物群の枯死 砂漠化 動物植物の絶滅。植物も枯れ、川も涸れ、赤茶けた砂漠に照りつける太陽の下、すべてが静まり返った「沈黙の夏」という、恐怖の連鎖が起きないことを、願わずにはいられません。 【おわり】

主なネオニコチノイド系殺虫剤

左「アドマイヤー」
バイエル社

右「モスピラン」
日本曹達

左「ベストガード」
住化武田農薬

右「スタークル」
三井化学

左「ダントツ」
住化武田農薬
バイエル